

インドネシアの音楽について〔ガムラン〕

〇概要

ガムランの語源は、ジャワ語の^{ガムル}gamel〈叩く〉〈手で操る〉という意味でも示されているように、大半が青銅製の打楽器で構成されています。伝統芸能や儀式をつかさどる合奏で、現在では合奏音楽そのものと、ゴング類や旋律打楽器を主体とした楽器群をも意味しています。ガムランの様式や楽器構成、演奏形態などは非常に多様です。

〇ガムランの地域性

①ジャワ中部

王宮から発展したジャワ中部のガムラン音楽は、宮中舞踊のほか、様々な宮廷儀礼で用いられているとともに、現在では民衆の間にも広く受け入れられ、結婚式などでも演奏されます。比較的、穏やかでゆっくりとしているのが特徴です。

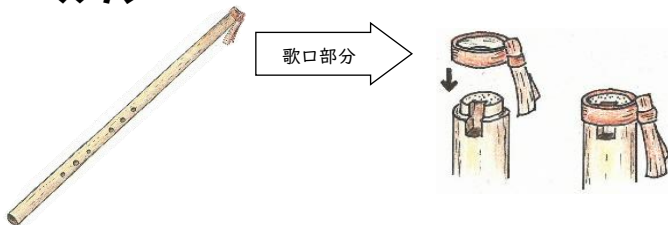
②バリ島

ヒンドゥージャワ文化を継承したバリ島では、音楽や踊りを伴う芸術は、宗教行事や儀式に欠かせないものとして、人々の生活の中で息づいてきました。ジャワのガムランとは異なり、きらびやかな音色、激しくダイナミックな響き、緩急を巧みに組み合わせた複雑なリズムなどで構築されています。

③ジャワ西部（スダダ地方）

ジャワ西部スダダ地方は、人々の生活と密着した特色ある音楽文化をもち、音楽様式も独特な様式をもちます。楽器編成も簡素で、ジャワ中部やバリ島のガムランと比べると小編成で派手さはありません。その分、スリン（竹製の縦笛）や声楽の技巧に際立ったものがあります。他の地域と比較すると、旋律的要素が強調されています。また、スリンや声楽の旋律を際立たせるために、カチャピ（撥弦楽器）の音楽が盛んであるのも、ほかの地域には見られない特色です。

スリン



インドネシアの竹製縦笛。ノンリードの管楽器の一つ。長さ 30～60cm。管の上端は竹の節で閉じられていて、節の少し下の側壁に四角い小孔をあけて歌口としてある。外壁には縦一本の溝が彫り込まれて歌口に達しているが、外壁の上端から歌口まで竹の薄片を結んだ鉢巻のようなものをかぶせてあって溝は見えない。上方からの呼吸は、溝と鉢巻に規制されて、歌口下端のエッジに導かれることになる。歌口のある方が楽器の背面であるのに対して、全面の下半には指孔が4～6孔並ぶ。鼻呼吸をしながら切れ目なく音を出し続けるのが奏法上の特徴である。バリ、ジャワ両島のガムランで旋律装飾用楽器として用いられるほか、カチャピとともに声楽曲の伴奏として、あるいは楽器合奏用にも用いられるなど、インドネシア各地に民俗楽器として広く分布している。

カチャピ



インドネシアの撥弦楽器。カチャピともいう。サンスクリット語で「亀」という意味。民俗楽器として、笛や他の弦楽器と小規模な合奏をしたり、歌の伴奏に用いられる。舟形の共鳴胴上面に、奏者から見て左右に金属弦7～24本を張る。奏者の右手側には胴面を横切る長いブリッジがあり、その外側に並ぶピンに弦の一端を止める。胴面には弦の数だけの小孔があり、弦の他端はここを通過して内部で止められている。弦ごとに可動の駒（柱）を立てて調弦する。大小各種あり、ジャワ島西部などで見られる。



○ガムランの音階

ガムランで使用される音階は、大きく分けて《ペログ》と《スレンドロ》の2種類があります。いずれの音階も等分音律を基本としています。これらの音階は西洋音楽のような規格化されたものではなく、同じ名前の音階であっても、それぞれのガムランのセットによって個々の音高や音程関係は異なることがあります。また、一つのセットの中でも、それぞれの楽器は合わせて鳴らした時にうなりが生ずるように、わざとずらして調律されています。

①ペログ

オクターブをほぼ9等分し、そのうちの7音を抽出した上で、実際の演奏ではこのうちの5音を使用します。日本の「沖縄音階」に似た音程関係になっているのが特徴です。

②スレンドロ

オクターブを5等分した5音からなっています。半音を含まない5音音階であるが、標準高度もなく、音名も地域によって違いがあります。しかし、スレンドロの近似値として、日本の「民謡音階」「律音階」に似た音程関係になっているのが特徴です。

イランの音楽について

○概要

イランの音楽史の上では、紀元後のササン朝（226年～651年）が重要で、この時代の宮廷では、多くの詩人や音楽家が活躍しました。中でもバールバドは、各種の音階、旋法、旋律からなる音楽理論を確立したことで有名です。楽器については、当時の遺跡の壁画から、2種類の縦型ハープ（正倉院の箏篋と同類※1）、トランペット（法螺貝）風の楽器、ネイのような縦笛、鍋型太鼓などが用いられていたことが分かっています。このように発達した音楽が、7世紀以降に周辺のアラブやトルコに影響を与え、それが文化と共に東方や西方へと伝わっていきました。

※1：このことから、ササン朝の文化が、東アジア（中国や日本）との交易や文化的にも影響を及ぼしていたことが明らかにされています。

○サントゥール

サントゥールは、イランの代表的な打弦楽器です。木製の共鳴箱に金属弦を張り、それをハンマーと呼ばれるバチで打って演奏します。サントが100、トゥールが弦で、「100本の弦」という意味をもつ名前の楽器（実際には、18コース×4弦の72弦）で、ピアノの祖先とも言われています。この楽器は、東方へはインドに、そして中国の揚琴ヤンチンから朝鮮の洋琴ヤングム。西方へは、ドイツでハックブレット、ハンガリーでツィンバロム、英語圏ではダルシマーとして広く用いられるようになりました。



○イランの音体系

イラン古典音楽は単旋律音楽で、その旋法体系はダストガーと言われ、アラブやトルコのマカームに相当します。いずれの旋法体系も7音音階に基づき、微分音、特に4分音（中間音）を含みます。イランの芸術音楽の基本旋法には、ダストガーが12種あり、それぞれ異なる雰囲気をもっています。また、イラン古典音楽のリズムは、その多くが無拍で、古典詩の韻律法の規則性によった、長短音節に基づく緩急・伸縮自在の緊迫感ある自由リズムです。有拍リズムもないわけではありませんが、主に2拍子系の単純な拍子に限られています。

ペルーの音楽について〔folklore〕

○概要

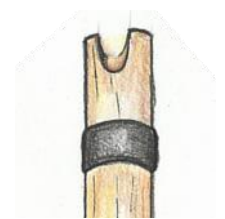
folkloreとは、英語のfolklore〔Folklore〕をスペイン語読みにしたものです。この言葉が、同じスペインのままスペインに入り、20世紀に入ってから次第に民俗音楽を指す言葉として使われるようになりました。最近では、中央アメリカや南アメリカの民族音楽や大衆音楽を意味する音楽用語として使われるようになりました。

○ケーナ

南アメリカやアンデス地方の民族音楽に用いられてきた縦笛。地域あるいは時代によって細部は必ずしも一様ではありませんが、カーニャと呼ばれるアンデスの葦を用いて作られます（現在では、竹製のものも作られています）。管の上端の縁を尺八のように、U字またはV字に切り込んで歌口とし、前面に6指孔、背面に1指孔をあけたものが一般的です。いろいろな長さのケーナがあり、低音用のものを〔ケナーチョ〕、高音用のものを〔ケニージャ〕とも呼びます。1960年代以来、ポピュラー音楽でも使用が目立ち、愛好者も世界中に広がっています。



〔ケーナの歌口〕



HS 分類法について

この楽器分類の仕方は『HS 分類法（ホルンボステル・ザックス法）』と言われます。この分類方法は、「楽器は音を出す道具」という考え方から、〔発音のしくみ〕を基本に分けられています。「体鳴楽器」「膜鳴楽器」「弦鳴楽器」「気鳴楽器」「電鳴楽器」5分類のいずれかに属することになります。様々な文献や博物館などでは、この分類法が広く使われるようになっています。

【参考文献】

- ・ 藤井知昭、水野信男、山口修、櫻井哲男、塚田健一編 『民族音楽概論』 東京書籍（1992）
- ・ 下中弘編 『音楽大事典』 平凡社（1983）
- ・ 藤井知昭監修 『音と映像による世界民族音楽大系レーザーディスク版解説書』 日本ビクター（1995）
- ・ 川口明子著 『スングのガムランにみられる口頭性の変容-芸術教育機関における楽譜の導入を中心に-』 東洋音楽研究 2002 巻 67 号（2002）

【視聴覚資料】

- 〔C D〕平成14～16年度用 教育芸術社 小学生の音楽6（NCS-1027～8）
- 〔DVD〕令和3年度改訂版 教育芸術社 教科書「中学生の音楽」準拠『中学生の音楽』 第11巻 2・3年下-3（NBS-831）